



Title	ポーにおける仮説形成的イマジネーション論
Author(s)	伊達, 立晶
Citation	文芸学研究. 2000, 3, p. 1-33
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/50922
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

ポーにおける仮説形成的イマジネーション論

伊達立晶

序

アメリカの作家エドガー・アラン・ポー (Edgar Allan Poe, 1809-49) の短編小説「モルグ街の殺人」(“The Murders in the Rue Morgue”, 1841) は、探偵小説(推理小説 [detective story]) の先駆けとして一般に知られている。たしかにこの作品は、現代において探偵小説として読まれているし、そのように読んで十分に楽しめるものであることは間違いない。実際この作品には、不可解な事件の謎を解く主人公と凡庸な聞き手(いわゆるワトソン役)という人物設定、主人公と無能な警察との対比、密室殺人、犯人の意外性といった、探偵小説の常套手段となる道具立てを認めることもできる。しかしこの作品が書かれた当時、まだ「探偵小説」というジャンルが存在しなかった以上、当然ながら、この作品は探偵小説として書かれたわけではない。むしろこの作品の探偵小説的な要素を後代の小説家たちが模倣し、そのスタイルをステレオタイプ化することによってはじめて、「探偵小説」というジャンルが形成されたと考えるべきだろう。そもそも、事件を解決する主人公のデュパンが「探偵 (detective)」だとは、どこにも書かれていないのである。それゆえこの作品を探偵小説として読むことは、後世の見方に当てはめて読む、いわば偏った読みであるといわざるをえない。作品そのものに即して読もうとするならば、まずそうした固定観念から離れる必要があるだろう⁽¹⁾。

この作品では、殺人事件が発生する以前に、そして登場人物が紹介されるよりも前に、まず分析力についての一般的な説明がなされている。それ

によれば、分析力とは数学的能力ではなく、むしろ法則性に基づかない領域において効力を発揮する推論能力であるという。たとえばチェッカーやホイストといったカードを使うゲームで勝つためには、ゲームの法則性に習熟するのみならず、相手のプレイヤーの表情やしぐさなど、様々なものを観察する必要があるが、その諸々の観察から勝負の状況を読みとる能力が、分析力だというのである [IV, 146-149]。「探偵小説」を読もうとする読者には冗長ともいえるそうした説明の後、すぐには理解しがたい次のような文章が続く。

「分析力 (analytical power) は、単なる発想力 (ingenuity) と混同されるべきではない。というのも、分析者は必然的に発想力豊かであるものの、発想力豊かな人間が際立って分析に無能であることがしばしばあるからだ。発想力は普通、構成的ないし結合的な能力 (constructive or combining power) となって現われる。しかし骨相学者はこの構成的ないし結合的な能力を (もちろん誤って) 原始的能力と想定し、別個の器官に割り当てている。ともあれこの構成的ないし結合的な能力が、他の点では白痴 (idiocy) に近い知力の人間のうちにあまりにも頻繁に見られるので、心について論ずる文人たちの間で広く注目されるようになっているのである。実際、発想力と分析能力との間には、ファンシー (fancy) とイマジネーション (imagination) との間よりも大きな、しかしその性格に関してはきわめて類似した相違がある。事実、発想豊かな人間はいつも空想的 (fanciful) であり、真に想像的 (imaginative) な人間は分析的であるほかないのである。」 [149-150] (傍点箇所はイタリック。以下同様。)

この文章の意味については本論中で検討するとして、現段階ではこの引用文に続く次の文章に注目したい。

「後に続く物語は、読者にとって、いま提示した諸命題についての注釈のようなものとなるだろう。」 [150]

つまり先に引用した文章が「諸命題」に相当し、以下に記される物語は

その命題に対する「注釈」に相当するというわけである。その少し前の箇所、ポー自身が「今、私は論文を書いているわけではなく、ただまったくアト・ランダムに所見を述べることによって、いささか奇妙な物語の端書きとしているだけである」[147]と述べているように、作品の中心をなすのは、あくまでも物語的部分である。だが少なくとも形式上は、命題と注釈からこの作品が構成されており、殺人事件をめぐる話はその注釈として挙げられたもののなのである。この作品を読解するにあたっては、こうした全体的構造をあらかじめ確認しておくべきだろう。

それでは上述の命題群はどのように理解されるべきなのだろうか。そしてそれは殺人事件の話といかに関わっていくのだろうか。以下の論考ではこうした問題点から出発し、ポーが、演繹と帰納（あるいは合理論と経験論）とは異なるものとして、イマジネーションによる仮説形成という推論形式を構想していたことを明らかにしたい。

1. 命題群の解析

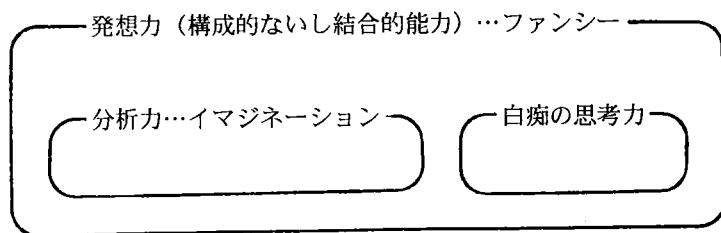
まず上述の命題群を分節して、要点を整理してみよう。

- ①分析力と発想力とは明確に区別される。
- ②分析力のある人間は皆、必然的に発想力豊かである。
- ③発想力豊かな人間は、必ずしも分析的ではない（白痴に近い人間にさえ、発想力豊かな者はいる）。
- ④発想力は、一般に、構成的ないし結合的能力として現われる（骨相学者は誤ってこれを別個の能力として、すなわち構成力と結合力として理解している）。
- ⑤発想力と分析力との相違は、ファンシーとイマジネーションとの相違に似ている。

⑥発想力と分析力との相違は、ファンシーとイマジネーションとの相違よりも程度が著しい。

⑦発想力豊かな人間は常に空想的（ファンシー的）であり、分析的な人間は常に想像的（イマジネーション的）である。

以上の内容を図表化すると、おおよそ次のようになるだろう。



ただしこの図では、⑥の主張が十分に反映されていない。それは、そもそも⑥の内容が直接的には⑦の内容と結びつかないからである。それゆえ⑥と⑦とを両立させるためには、この命題群には明示されていない別の比較基準を、すなわちファンシーとイマジネーションとの相違を発想力と分析力との相違よりも著しいものとする別の契機を想定せねばならない。この問題の解決は現段階では保留せねばならないが、ひとまず⑥を除く命題群と図に即してその内容について検討し、その後でこの問題について考察してみたい。

命題群全体の骨子は、分析力と発想力とを概念的に区別しようとすること（①、⑦）にある。そしてその二つの能力を説明するために、「構成的ないし結合的能力」や「ファンシー」、「イマジネーション」といった別の三つの能力との関係が論じられているわけだが、実際のところこの三つの能力についての概念が明確に理解できないために、命題群全体の意味がわかりにくくなっているのだといえよう。

この三つの能力については、ポー自身の思想、特に詩論において考察の対象とされている。「モルグ街の殺人」発表の前年（1840年）1月に、ポーはトマス・ムーアの詩「アルシフロン」（“Alciphron”）に関する評論（本稿では「アルシフロン論」と呼ぶ）を発表し、そこで次のように論じている。人間の心は無から何かを想像する（imagine）ことはできない。この世に存在しないグリフィンのような存在を想像する場合でも、実際には感覚的経験を経て獲得された既存の観念（鷲の頭部と鉤爪、ライオンの胴と下肢）を結合して想像しているにすぎない。それゆえいかに新奇な構想であっても、その構想は単に普通でない結合に基づいていると考えられる。イギリスの詩人コウルリッジは「ファンシーは結合し、イマジネーションは創造する（the fancy combines, the imagination creates）」と言っているが⁽²⁾、ファンシーもイマジネーションも無から存在を「創造」するわけではないので、両者にさほど違いはないのだ [X, 61-62]。

このようにポーは詩作能力としての「ファンシー」と「イマジネーション」について言及し、そのどちらの能力も詩の題材を現実世界の諸事象から採り、それらを結合して新奇な詩を構成するのだと論じている。「ファンシー」は「空想的な／奇矯な（fanciful）」詩をつくりだし、「イマジネーション」は示唆深い理想的な詩をつくり出すという相違はあるものの[62-63]、結合による作品構成という作用に関しては同等だというわけである。

以上の議論をふまえたうえで、「モルグ街の殺人」の命題群に戻ってみよう。「アルシフロン論」の場合と同様に、④においても構成と結合とが区別されていないことが、まず確認できる（この点で骨相学の見解が退けられる⁽³⁾）。そして発想力がこの「構成的ないし結合的能力」として現われるということ（④）は、発想力が常にファンシー的であること（⑦）から理解されよう。いかなる発想であれ無から生じることはなく、常に何らかの思考の素材を結合して構成されるのである。そして分析的な人間は常に発想が豊か（②）なのだから、その人もまた当然ファンシー的である。

それゆえ、「モルグ街の殺人」の文中では明確に示されていないが、分析力もまた「構成的ないし結合的能力」として現われると考えられよう。そしてこの分析力が、ファンシーと同様に結合作用をもつイマジネーションと関連づけられ(⑦)、①と③で指摘された発想力と分析力との相違はファンシーとイマジネーションとの相違から考察されることになる(⑤)。ファンシーとイマジネーションとの相違は、「アルシフロン論」ではその能力の所産が奇矯であるか理想的であるかの相違によって区別されていた。それと同様に、専らファンシーに頼る人間が奇矯な空想しか思いつかないのに対し、イマジネーションを駆使する人間は、単なるファンシーに基づく思考を越えて、理想的な分析をおこなうことができるというわけである。本稿の序で触れた例に即していえば、分析者のイマジネーションは、ゲームのあらゆる局面や相手のプレイヤーの様子など多様な情報を巧みに結合し、整合のとれた分析へと結実させるのだといえよう。その結合の巧みさによって、ファンシーによる発想の域を越えるわけである。

このようにポー自身の詩論と「モルグ街の殺人」における分析力論との間には類似性ないし連続性が認められるのであるが、任意に虚構的世界を構築する詩作と、現実の物事の整合的な説明を目指す分析とがまったく同等のものと考えることには、やや難があるといわざるをえない。すなわちファンシーのみに基づく詩作が(理想的ではないとしても)詩として成り立つ作品をつくりだすのに対し、ファンシーのみに基づく「発想力」は、物事の説明としてはまったく役に立たない推論しか導き出せないのである。ここまで保留にしてきた⑥の命題は、じつはこの点に関して言及したものであるように思われる。すなわち発想力と分析力とは、単に理想的か否かという程度の問題において異なっているのではなく、物事の整合的な説明に役立つか否かという実践的なレベルにおいて著しく異なっているのである。「モルグ街の殺人」における諸命題の問題は、とりあえずこのように理解できるだろう。

2. モルグ街の殺人事件と分析力

前節においてある程度明確になった当該の命題群は、それに続く作品の物語的部分といかに関わるのだろうか。本節ではその物語的部分で活躍する登場人物デュパンの思考方法に注目し、その分析方法のありようについて考察しよう。

この命題群の後の物語的な部分は二つの部分から、すなわち主人公のデュパンを紹介するとともに彼の分析力を示す短いエピソード[150-156]と、モルグ街で起こった殺人事件をデュパンが分析する話[156-192]から構成されている。前半部分ではデュパンがファンシーのみならず活発なイマジネーションをもち[151]、分析力に優れた人物[152]として紹介され、その分析方法が大雑把に説明されている。だが彼の分析方法について検討するためには、後半の部分に注目するだけでも十分だろう。デュパンの分析に即して、その事件と解決に至る経緯とをまず概観してみよう。

モルグ街で起こったレスパネー母娘殺人事件に対して、デュパンは主に次の四つの観点に即して分析を進めている。

第一の観点は、犯行現場近くにいた人々の証言に関するものである。これらの人々のうち誰一人として犯人を目撃した者はいなかったものの、それぞれ犯人の声を耳にしている。しかし様々な国籍をもつ証人たちの証言は互いに整合していない。たとえばある証人は犯人の声がスペイン語ではないかと証言しているのだが、別の証人たちは犯人の声がイタリア語であるとか、ドイツ語、英語、ロシア語であるなどとそれぞれ証言しているのである。デュパンは各人の証言を言葉どおりにはとらず、各人が皆、犯人の声を意味不明の外国語だと考えている点で整合することに注目している[170-171]。

第二の観点は、犯人の逃走経路に関するものである。犯行現場はドアも窓も内側から施錠されており、密室状態にある。デュパンは独自の調査に

より、犯人が通りえた唯一の経路として一つの窓に注目し、窓を固定しているようにしか見えない釘が実際には壊れていることを発見する。しかし犯行現場は建物の四階に位置しており、その窓を通ったとしても窓の外にある避雷針に飛び移らねば逃げるができないため、犯人は人間離れした怪力と勇気をもっていると考えざるをえなくなる [172-177]。

第三の観点は、犯行の動機に関するものである。レスパネー夫人は、八年間出金することなく蓄えてきた貯金から四千フランをおろした直後に殺害されている。そのため警察は、この犯罪の動機が金銭的な問題と考えて、夫人に金銭を届けた銀行員を逮捕している。しかしデュパンは、家捜しされたと警察に考えられた室内の状況が単に荒らされただけである可能性に配慮し、また実際に室内にその四千フランが残されていることを根拠として、警察による推理に整合性が欠けていることを指摘している [178-179]。

第四の観点は、殺害方法に関するものである。この事件では、絞殺されたレスパネー嬢は暖炉の煙突の中に押し込まれ、その母は剃刀で首を切断されて中庭に投げ落とされている。その異常なまでに残虐な、そして怪力を伴って為された殺害に、警察は困惑しているのである [179-180]。

この四つの観点から事件を推理してきたデュパンは、作品の語り手に次のように問いかけている。

「驚くべき軽快さや人間離れした力、獣的な残忍さ、動機のない虐殺、人間性からかけ離れた恐るべきグロテスクさ、そして多くの国の人々の耳に異国の響きがして全然明瞭に音節化されない声、といった諸観念を結合する (combine the ideas) ところまで我々はきたことになる。それではいったいどんな結果に帰結しただろう。私はどんな印象を君の空想 (fancy) に与えただろうか。」 [180-181]

一読して理解できるように、作品の語り手は、思考する際に専らファンシーのみに基づいて観念を結合する人物として設定されている。この語り

手は、デュパンの問いに対して今さらながら事件の異常さに気づき、犯人はおそらく狂人だろうと答える [181]。もちろんこの推理は、単なる狂人には不可能と思われる人間離れした犯人の行動力を十分に説明するものではない。したがって論としての整合性を求めるためには、犯人が人間であるという先入観から疑わねばならないことになる。デュパンは、犯行現場に残された毛髪や、死体の首に残された手の跡といった証拠を補足しつつ、犯人がオランウータンだと推理する [181-183]。そしてその分析の後、オランウータンの飼い主との面会に成功し、その男の証言によってデュパンの分析の正しさが証明されるのである [185-191]。

たしかに専らファンシーのみに基づいて推理する語り手も、デュパンに促されて所与の情報を結合し、新奇な結論を導き出している。だがその推理は、所与の情報を整合的に説明したものとはならず、単に空想的な発想にとどまるものでしかなかった。これに対してイマジネーションに基づくデュパンによる分析では、新奇であるのみならず十分に整合性のある結論に到達したわけである。分析力と単なる発想力との対比、ないしはイマジネーションとファンシーとの対比をめぐる諸命題は、こうしたデュパンと語り手との思考方法の対比を通じて、具体的に示されているのだとひとまず理解できよう。

しかしここでイマジネーションに基づく分析を、諸事実の枚挙に基づく単純な帰納推理として理解してはならない。というのも、帰納推理は考察すべき「事実」が予め明確に設定されている場合に成り立つ推理であるのに対し、デュパンによる分析の場合は、膨大な情報群の中でどの情報が事件解明に必要な情報なのか予め明らかではなく、また証人の証言や外見上の密室状態を文字通り「事実」として認めることもできないからである⁽⁴⁾。それゆえ事件の分析においてまず必要となる作業は、事件解決に役立つ情報を判別するとともに、不正確な情報を修正することだといえよう。個々の情報を整合的に結合するイマジネーションには、こうした作用が期待さ

れているのである。このような観点から、イメージーションに基づく分析のあり方についてさらに検討してみよう。

デュパンは、この殺人事件の捜査を担当する警察がある程度は巧妙であり [165]、綿密に捜査していること [166] を認めている。しかし逆にその綿密な捜査方法自体が事件の解決を妨げているのだとデュパンは言う [165-166]。物事を綿密に見る捜査に対するこの批判は、いささか奇妙なものに思われよう。というのも優れた推理に求められるのは、何よりもまず、些細な手掛かりをも見逃さない鋭敏な観察力だと考えられがちだからである。もちろんデュパンは、そのような綿密な捜査が十分な成果につながる場合があることも認めている [166]。しかしこのような方法がいつでも成功するわけではないと言うのである [166]。デュパンは警察の捜査官の捜査方法について次のように述べている。

「彼は、対象をあまりに近くからとらえることによって、自らのヴィジョンを損ねている (He impaired his vision by holding the object too close)。たぶん彼は一つや二つの点では並外れて明確に見ることができるのだろうが、そうすると必然的に物事を全体として見失ってしまうことになるのだ。」 [166]

この主張は、いわゆる「木を見て森を見ず」といった偏狭な観察方法に対する批判として理解してよい。しかしこのような偏狭さに陥らないようにするのは、容易なことではない。なぜなら警察は膨大な情報を迅速に処理することが要請されるため、事件の直接的な手掛かりになりそうな特定の事象に目星をつけ、その周辺を重点的に捜査しがちだからである。そしてその際、捜査の常道に従って、「犯人はどのような人間なのか」、あるいは「犯行の動機は金銭目当てなのか、それとも怨恨なのか」などと問いを立て、その疑問に答えてくれそうな情報について目を向けてしまうことも、少なからずあるだろう。もちろん通常の事件の場合は、このような捜査も一定の成果をあげることができる。しかしモルグ街の殺人事件のような異

常な事件の場合、こうした捜査方法が逆に迅速な捜査の妨げとなるのである。いわば捜査の慣例的な手順に従うことによって、目をつける情報に偏りが生じてしまうのだといえよう。対象を近くから見ることに對するデュパンの批判は、このような捜査の常道に對する批判なのである。

このような異常な事件を捜査する際に必要なのはむしろ、数々の異常さ自体が整合的に結びつく観点へと到達することである。そのためには、「事実」か否かわからない膨大な情報を総体的にとらえ、諸々の情報の連鎖を見出すことが必要になる。その作業を通じて、不正確な情報は相対的に修正され、慣例的な思考によっては見落とされてしまうような情報の結びつきも見出されるようになるだろう。そこで見出される情報の結びつきは、先入観にとらわれていた思索者にとっては、今までに考えたこともなかったような新奇な結合として意識されることになる。このように情報を新奇かつ整合的に結合し、先入観にとらわれない論を形成していく思考方法が、イマジネーションに基づく推論なのである。先に挙げた四つの観点に即して分析を進めるデュパンは、当初から一貫してこのような方法を探っていたと考えるべきだろう⁽⁵⁾。

所与の情報全体において矛盾のない推論が導き出されたとしても、それはもちろん限られた情報に基づく蓋然的な仮説にすぎない。それゆえデュパンによる分析はオランウータンの飼い主の証言によって証明されねばならなかったのであるし、もしもその推論と整合しない情報が新たに付け加わるようなことがあれば、推論の全体的な修正を迫られることになっただろう。つまりイマジネーションによる推論は、あくまでも蓋然的な仮説を形成する思考にすぎず、それ自体として事件の真相と合致する保証はないのである。このことはたしかにイマジネーションに基づく分析の限界である。しかしこの限界は推論方法としての弱点を意味するものなのだろうか。そしてその限界を克服するような、より優れた推論方法はありうるのだろうか。次節ではこうした点について考察を進めたい。

3. 演繹、帰納、イマジネーションに基づく推論

宇宙論として知られるポーの『ユリイカ』(Eureka, 1848)の冒頭部では、未来人の手記という形式を借りた一連の論述(ポー研究者の間ではしばしば、ポー自身の語[XVI, 187]を借りて「注目すべき書簡」“A Remarkable Letter”と呼ばれている)が挿入されている[188-198]⁽⁶⁾。この論述において、ポーは、演繹や帰納と対比しながらイマジネーションに基づく推論について論じている。

未来人としての語り手の人格を借りて、ポーはまず19世紀までの哲学をアリストテレス、ユークリッド、カントに代表される「演繹的ないし・ア・プリオリ哲学」とフランシス・ベーコンに代表される「ア・ポステリオリないし帰納的」哲学との二つに区分する[188-189]。ポーの主張によると、この両派が学問領域を支配しているために、演繹と帰納以外の思考方法は学問的に認められていないが、実際に大きな学問的成果をあげてきたのは、それら二つの思考方法ではないという。なぜならば「真の科学の進歩」というものは「全歴史が示しているように、見かけ上は直観的な跳躍によって (by seemingly intuitive leaps) その最も重要な歩みを推し進める」からだという[189]。すなわち、演繹と帰納しか認めないという学問のあり方は「イマジネーションの抑圧 (the repression of imagination)」にほかならないというのである[190]。

演繹や帰納に頼る立場に対するポーの批判は、①それらの思考の過程が科学の飛躍的な発展を阻むこと、および②演繹の基礎を成す「公理 (axiom)」や帰納の基礎を成す「事実 (fact)」がすべて真実と認められるだけの確実性をもたないこと、以上の二点に基づいている。②が①の原因となる側面もあるため両者を完全に区別することはできないが、便宜上①と②に分けて検討してみよう。

① ポーは、演繹と帰納が科学の飛躍的な発展を阻むことを、くどいくらい繰り返し強調している [188-190]。だがその理由については、十分に説明されているとはいえない。説明するまでもないと考えたからかもしれないが、この問題については説明を補う必要があるだろう。

演繹とは、想定された一般的前提から、論理的に特殊命題を導き出す推論形式であり、前提が真であるとき必然的に結論も真となるものをいう。その例としては、「AまたはBである」という大前提と「Aではない」という小前提から「Bである」という結論を導き出す推論を挙げることができるだろう。この推論形式では、前提に含まれる内容に関して確実な結論を導き出すことができるものの、前提を立てた時点で思考の枠が決定されるため、予想を越えるような結論が導き出されるようなことはない（上の例の場合、CやDなどについて思いをめぐらせることはない）。したがってこの推論形式には、未知の事象に光を投げかけたり、何かを発見したりする働きを期待することはできない。演繹は、何らかの謎を解明したり新奇な発見をしたりするには適さない推論形式だといえよう。

一方、帰納とは、複数の特殊な経験的諸事実のうちに一定の共通性を探り、そこから総合的な一般命題を導き出す推論形式である。この推論形式は、すべての事例を完全に枚挙して為される完全帰納と、枚挙できるかぎりの若干の事例からあらゆる事例に関して推論する不完全帰納とに区分される。前者は、単に既知の諸事実を概括的に再確認するだけのものである。それゆえこの方法では、確実な結論を導き出すことはできるものの、何か新しいものを発見することができるわけではない。これに対して後者は、観察される諸事実から類推して、まだ観察されない事象にまで推論を下すものである。それゆえこの方法では、あくまでも蓋然的推論の域を越えないものの、既知の部分から未知なる全体へ飛躍して推論を進めることができる。しかしこの不完全帰納における「飛躍」とは、既知の観察に即した一定の理解を延長させて未知の事象に当てはめるだけのものであつ

て、直接的には意外性のある発見を導き出すものではない。むしろその帰納が失敗するような新事実が現われることによって、はじめて何事かを発見できるのであって、新事実が現われるまでは、慣習的な思考にとらわれ続けざるをえないのである。オーストラリアで黒いスワンが発見されるまで「すべてのスワンは白い」と信じられていたという有名な逸話は、この帰納の特性をよく示した例だといえよう。「モルグ街の殺人」において警察が通常の思考の枠にとらわれていたように、不完全帰納は、観察される諸事実に対して抱く慣例的な思考の枠でもって、未知のものをとらえようとする推論なのである。

このように演繹と帰納のいずれにおいても、ある確固たる前提から出発する限り、その前提が予め思考の方向を限定してしまい、推論される内容はその視座に即したものに制約されざるをえない。いわば既知の問題を確認したり、思考の幅を多少広げたりすることはできたとしても、今まで考えもしなかった新奇な視点を導入したり、思いがけない発見を促進することは、演繹や帰納には不可能なのである。演繹と帰納が科学の飛躍的な発展を阻むというポーの主張は、この二つの推論形式自体の性質に起因するものだと考えられよう。

② ポーは「いかなる真実も自明なものではない」[188]という立場から、自明の真実として認められるような「公理」の存在を否定している[192]。すなわち真実は本来いつ誰にとっても一定不変のものでなければならないはずなのに、実際には時代を越えて万人に真実と見なされる公理など存在しないというわけである（『ユリイカ』本文[240-241]）。このような見解に立つポーは、たとえば「一本の木は、一本の木であると同時に一本の木でないことはありえない」という典型的な矛盾律さえ真実とはいいきれないと主張する[194]。たとえ「一本の木であると同時に一本の木でない」という状態について我々には考えることができないとしても、そ

れはその状態の不可能性に起因するのではなく、そのように考えることのできない我々の思考力の限界に起因するといっているのである [194-195]。

この主張は何か詭弁めいたもののように思われるかもしれない。たしかに「AはAであるとともに非Aであることはない」という矛盾律の命題が真でないというのであれば、その主張は批判されるべきであろう。なぜなら矛盾律は「Aであること」と「非Aであること」とが両立しえないことを約定的に定めたものであり、その命題が真であることは当為として要請されているからである。しかし感覚的に知覚できる具体的な「一本の木」に関して論ずる場合、ポーの主張には詭弁ではすまされない問題がある。この問題に関しては、ポーの短編小説「メスメリズムの啓示」(“Mesmeric Revelation”, 1844) に示された思想をふまえる必要があるだろう。

ポーは「メスメリズムの啓示」において、人間をその身体の種類に応じて二通りに区分している。すなわち人間は、五官に応じたものしか知覚できない不完全な人間と、完全な感覚器官をもつ人間、すなわち天使との二通りに区分せられるといっているのである [V, 250-254]。いささか突飛な考えではあるが、ポーの強調したい点は、生身の人間の知覚が五感に限定されており、我々はその部分的な知覚をもとに勝手な世界像を構成しているということにある。すなわち我々人間の不完全な感覚器官は、五官にとらえられるかぎりの特定の物質をとらえるとともに、それ以外の物質を無視するものだといっているのである [251]。それゆえもし仮に五官以外の感覚器官をもつことができるならば、我々にとって無と思われていたようなものまで知覚の対象となり、我々が通常抱いているような世界観は根底から覆されることになるだろう [253-254] ⁽⁷⁾。

もちろんこの作品で主張された身体論自体も真実といえるわけではなく、ポー自身もそのことを認めている ⁽⁸⁾。しかしこの考え方は、限界ある知覚をもとに一定の世界観を構築せずにはおれない人間に、はたして世界の真のありかたなど理解できるのか、逆に人間が勝手に構想した世界像を

世界に対してこじつけているだけではないのか、という反省を促すものだといえよう。そのように不完全な感覚を通じて知覚し、その知覚を統合してとらえた「一本の木」は、それ自体として真にいかなるものなのか人間には知りえないというのが、ポーの主張なのである。換言すれば、生身の人間には、約定的な思弁の領域において演繹的に確実な思考ができたとしても、具体的な経験世界に関しては絶対的に確実な真実など理解することができないということである。

こうした可謬主義 (fallibilism) 的な見解は、経験的事実の積み重ねによって真実に迫ろうとする経験科学とも対立する。すなわちベーコン派の「ご自慢の事実、常に事実であったわけでは決してなかった——それが事実であると前提しなければ、少しも重要なものではなかった」[190-191]と考えられるのである。ポーは、未来人としての語り手の口を借りて、過去の祖先たち (つまりポーの時代までの人間) の思考方法についてさらに次のように述べている。

「我々の祖先たちの誤りは、ものを目に近づけるほど必然的にものがよりはっきり見えるはずだと空想するようなお利口さんの誤りに似ていた。」

[190]

一読してわかるように、この批判は「モルグ街の殺人」における警察批判と重なるものである。細かな観察によって得られた知識を「事実」と判断したり、その「事実」を蓄積することは、それ自体として「真実」への接近に寄与するものではない。その方法は、単に推論の飛躍的な発展を阻むばかりでなく、無意味な細部に固執する傾向をはらみ、恣意的なあるいは慣習的な思考の枠にとらわれ続ける危険性をも伴うのだといえよう。

人間の思考の限界に対するこのようなポーの主張は、先入観に基づく前提に対する自浄作用を推論形式自体の内にもため演繹と帰納の弱点を指摘するものではあるが、だからといって一切の知的な思考を放棄するような懐疑主義に向かうものではない。ポーが求めているのは、確実な真実の探

究という目標を断念し、新奇でありかつ整合性のある蓋然的仮説を立てて、問題に対する暫定的な理解を求めることにあるのだといえよう。

さらにポーは、たとえば暗号解読において、上述のような演繹と帰納とが効力を発揮しえないことを指摘する[196]。ここでポーが念頭に置いている暗号とは、自らの小論文「暗号に関する覚書」(“A Few Words on Secret Writing”, 1841)や短編小説「黄金虫」(“The Gold Bug”, 1843)で取り扱ったような、文字を他の記号に置換してできた暗号のことだと考えられよう。このような暗号解読の場合、解読者がまず直面するのは、意味を成さぬ記号の連なりである。そこには何ら自明のものはなく、明確な前提から推論を進めるような演繹や帰納は何の役にも立たない。そのため「黄金虫」の登場人物レグランドは、蓋然性の高い仮説を重ねていくことによって、暗号を解読しようとしている。彼はまず暗号文のなかで最も多く使われている記号「8」を、英語において用いられる頻度の最も高い「e」とであると仮定する[V, 133]。その際、「meet」や「fleet」のように英語において「e」が重なる場合が多いことと、暗号文の中に「88」という表記の多いことが一つの根拠となっているが[133]、これも何ら確実な根拠となるわけではない。次にレグランドは、「e」を用いた定冠詞「the」となりうる三つの記号の連なりが暗号文においても多用されているかどうかを検討し、実際にそのような連なりがいくつか存在していることを見出している[133-134]。これによって「8」が「e」である蓋然性が高いと判断されるとともに、「the」の「t」と「h」に相当する記号も、高い蓋然性で割り出されるのである。この後その「t」、「h」、「e」を手掛かりにして、「t-ee」は「tree」ではないかというように推論を進めて他の記号にも仮定を立ていき、最終的にはその暗号文が解読される[134-136]。この解読作業が、自明の前提から展開していくような演繹や帰納に基づくものでないことは明らかであろう⁹⁾。のみならず、厳密に論理学に即すならば、その解読が

真に正しい読みであるという確証も決して得ることができない。しかしそれにもかかわらず、謎に満ちた記号の連鎖は意味を成す文章となり、その解読文の信憑性を疑う積極的な理由はなくなるのである。

「注目すべき書簡」では、演繹と帰納に拘泥する学者たちが実際にはたいした業績をあげることができず、むしろケプラーのように「熱烈なイマジネーション」をもった学者のほうが革新的な理論を打ち立てることができたと述べられている [XVI, 196-197]。すなわちケプラーは、後にニュートンに継承されることになる諸法則を「想像した (*imagined*)」のだという [197]⁽¹⁰⁾。ここでは肝心のイマジネーションについて十分な説明がなされていないので、この箇所だけ読むと、あたかもイマジネーションに基づく推論が単なる当て推量にすぎないかのように誤解されかねない。だがここまで検討してきた考察をふまえるならば、イマジネーションによる推論が、思考対象の総合的な分析による発見的な推論形式と考えられていることは明らかだろう。たしかにイマジネーションによる推論には、演繹のように一定の前提から確実な結論を導き出すことはできないし、帰納のように「確実」な事実に基づいて推論を進めることもできない。しかし逆に、イマジネーションによる推論は、演繹や帰納によっては解決できない問題、すなわち解決のための自明の前提がなかったり慣習的な思考では理解できないような謎に対して、効力を発揮するのである。もちろんそこで導き出される推論は、あくまでも仮説の域を越えるものではない。しかしその推論が緊密な整合性をもつかぎりにおいて、高い蓋然性をもつものとして認められるようになるのである。そもそも自明の前提のない謎に対して、蓋然的仮説の域を越える考察は不可能である。自明なものなど存在しないと考えるポーにとって、整合性のある蓋然的推論こそ最高の推論なのだといえよう。「注目すべき書簡」のこの論述は、演繹と帰納という従来の推論形式との対比を通じて⁽¹¹⁾、イマジネーションに基づく蓋然的推論の意義を主張したものと考えることができるだろう⁽¹²⁾。

4. 西洋思想史におけるポーの位置

それではポーのイマジネーション論は、西洋の思想の流れにおいていかなる位置を占めるのだろうか。本節では、この点について俯瞰的に考察してみたい。

ポーは「注目すべき書簡」において、アリストテレスの著作に準拠する演繹的な哲学がフランシス・ベーコンの帰納的哲学の出現によって権威を失い、その後、再び演繹的哲学が帰納的哲学と並ぶ権威を取り戻したと論じている [189]。きわめて大雑把な説明といわざるをえないが、この論旨は、アリストテレス・スコラ的な世界観がベーコンによって批判され、その後ベーコン主義を継承したイギリス経験論とデカルト以来の大陸合理論とが西洋思想の主導権を握るようになった状況を説明したものと考えられよう。よく知られているように、ベーコンは、人間の構想した思考体系にはおさまりきれない精妙さが自然の内に存在するという立場から、実験と観察に基づく帰納によって自然を解明することを主張した。そして一方のデカルトは、明晰判明な先取観念や先験的仮説に基づいて演繹的に世界を解明すべきだと主張したのだった。たしかにロック、バークリー、ヒュームと続く狭義のイギリス経験論は、次第に観念論的傾向を強めていき、ドイツ観念論への道を開く側面をもっていた。しかしイギリス思想の伝統を広く見るならば、(俗流) ベーコン主義⁽¹³⁾の影響のもとで、ニュートンをはじめとする経験科学が広く支持されてきたことは否定できない。そしてフランスでも、ヴォルテールが『哲学書簡』(*Lettres philosophiques*, 1734)においてロックやニュートンの思想を称揚して以来、経験世界から乖離せざるをえないデカルト主義の弱点が広く認められるようになり、仮説に頼らぬ帰納的な思考様式が重視されるようになったのである。これに対しドイツでは、フォイエルバッハの批判を受けるまで、先験的な概念や形式を通じて感覚的経験を判断する観念論哲学が継承されていき、このドイツ思

想がイギリス・ロマン主義やフランス・スピリチュアリズムのような反動的思想に影響を及ぼしていったのだった。演繹に頼る先験的思考方法と帰納に頼る経験的思考方法とが拮抗しているというポアの指摘は、乱暴な図式化であるとはいえ、ベーコン主義とデカルト主義という二極に由来する西洋近代の思想状況を念頭に置いたものと理解することができるだろう。ポアのイマジネーション論は、こうした従来の思想の流れに異を唱え、可謬主義的見解を軸に第三の方向を示すものとして構想されたのである⁽¹⁴⁾。

ポアがイマジネーションによる推論の重要性を主張した頃、論理学の領域において、演繹や帰納とは区別されるような第三の推論形式が認められていなかったことにも注目すべきだろう。演繹と帰納以外に仮説形成的な第三の推論形式を初めて提唱したのは、プラグマティズムの創始者でもあるアメリカの論理学者パース（Charles Sanders Peirce, 1839-1914）だと一般にいられている。すなわちパースはこの仮説形成的な推論形式を「アブダクション（abduction）」とか「遡源推理（retroduction）」、「仮説形成（hypothesis）」などと呼び、演繹や帰納に先行すべき思考方法として多くの論文で論じているのである（本稿ではパース研究の通例に従い、「アブダクション」の名称に統一する）。彼のアブダクション論を概観し、ポアのイマジネーションによる推論方法と比較してみよう。

パースによれば、「アブダクションとは、説明的仮説を形成する方法である」（5, 171）⁽¹⁵⁾ という。この方法は、「驚くべき事実Cが観察されている」という事態に対し、「だがもしもAが真であるならば、Cであることは当然のことだろう」といえるような説明的仮説Aを探し出し、「それゆえAが真ではないかと思うのはもっともだ」と推論する段階をふむものである（5, 189）。この説明からも理解できるように、ここで提起される仮説は、所与の公理や事実から導き出されるものではない。それゆえこの推論はあくまでも蓋然的推論にすぎない。しかしその仮説が矛盾なく当の事例

を説明できるかぎりにおいて、その推論はもっともらしい印象を喚起することができる。こうした仮説を立てて、謎に対する一つの蓋然的な解答を導き出す推論方法が「アブダクション」なのである。「モルグ街の殺人」において犯人をオランウータンと仮定して整合的な説明を導き出した推論方法は、まさにこの「アブダクション」として理解することができよう。このアブダクションこそ、「新しい観念を導入する唯一の論理的操作」(5, 171)なのである。

それではそうした仮説そのものは、どのように導き出されるのだろうか。パースは「アブダクションの示唆は閃きのようにやって来る。それは洞察の働きである。ただしきわめて可謬的な洞察 (fallible insight) ではあるが」(5, 181)と述べ、アブダクションが説明のつかぬ一種の思いつきに近いものであることを示唆している⁽⁶⁾。しかしそのアブダクションは、先験的直観によって得られるようなものではなく、既知の経験的知識に基づくものだという。

「たしかに仮説の様々な諸要素は、我々の心の内に既に存在していたものである。しかし我々の熟考の前で新しい示唆を閃かすのは、今まで寄せ集めようとは夢にも思わなかったものを寄せ集めてできた観念である。」(5, 181)

つまりアブダクションは、見かけ上は直観的であるとはいえ、仮説を無から生み出すわけではなく、(ポ一的にいえば)既存の諸要素を新奇に結合することによって仮説を産出する推論方法なのである⁽⁷⁾。

「神の実在についての疎かにされてきた論証」(“A Neglected Argument for the Reality of God”, 1908)という論文によれば、「瞑想 (Musement)」という特殊な思考方法に基づくとき、アブダクション(この論文では「遡源推理」)は効力を発揮するという。この「瞑想」とは、少しも論理的に秩序だった思考ではなく、いわば思考の「純粋な戯れ (Pure Play)」ともいうべきものであるが(6, 458)、これによって解明すべき謎を解くヒントを

得ることができるのである。すなわち思索者には、確たる目星をつけることなく「諸事実を観察し、それらを多様に配列し直して」、説明的仮説を生じさせることが求められるのである（6, 488）。この「瞑想」の効用について論ずる文脈において、パースは次のように述べている。

「エドガー・ポーが『モルグ街の殺人』のなかで述べているように、一見したところまったく解決不可能と思われる問題も、そうした事情によって、かえってすんなり合う鍵を受け入れることになる。」（6, 460）

この指摘は、「モルグ街の殺人」におけるデュパンによる発言、すなわち「この謎は、それが容易に解決されると思われるまさにその理由によって、つまりその外観の極端な性格によって、解決不可能だと思われる」[IV, 168] という発言をふまえたものであり、パースのこの論文の欄外にもこの文章が引用されている。つまりデュパンが犯行の人間離れた性格それ自体に注目することによって警察には思いもよらぬ犯人像を想像しえたように、観点を変えることによって問題の難解さが逆に解明の糸口となりうることをパースは指摘しているのである。このような新たな観点を得ることにこそ、「瞑想」やそれに基づくアブダクションの効用があるのだといえよう。

以上の説明からも明らかなように、演繹や帰納とは区別されるパースのアブダクションは、ポーの主張するイマジネーションによる推論と似通った性格をもっている。のみならず、パース自身が「モルグ街の殺人」における思考方法を熟知しており、それをアブダクションの説明に用いていることも確認できた。これだけのことを証拠にポーからパースへの影響を論ずることは困難であるとしても⁽¹⁸⁾、ポーのイマジネーション論がパースのアブダクション論を先取りするものだったことは容易に指摘できよう。ポーの仮説形成的イマジネーションに関する理論は、経験論や合理論の伝統からプラグマティズムへの移行期の思想として、思想史的に位置づけられるのである。

結び

以上の考察により、探偵小説の先駆けといわれる「モルグ街の殺人」がじつはイマジネーションに基づく分析を提唱する作品であり、その分析が演繹や帰納とは区別されるべき仮説形成的な推論であったことが確認できた。ポーは、結合作用による新奇性の産出を原理とする詩的イマジネーションを推論方法に転用し、経験的な諸事象を新奇に結合して蓋然的仮説を形成する推論形式を提唱したわけである。本稿を締め括るにあたり、この推論方法と詩作の方法との接点を見直すことによって、この推論方法の特性をあらためて指摘しておこう。

ポーは、小論文「アメリカの散文作家たち (2)、N・P・ウィリス」(“American Prose Writers, No. 2, N. P. Willis”, 1845)において、本稿の第1節で挙げた「アルシフロン論」の論旨をほぼ逐語的に繰り返し [XII, 37-38]、その後次のような論を付け足している。イマジネーションによる新奇な結合は、ただ美のみを目的としており、その所産は「調和的 (harmonious)」である。そしてその調和があまりにも自然なものと感じられるゆえに、結合の新奇性は「なぜこうした結合が今まで想像されなかったのだろう」という疑問を伴う形で感じられるという (これに対してファンシーの所産ではやや調和が崩れ、「新奇性」も違和感を伴う結合の「意外性 [unexpectedness]」として感じられることになる) [39]。つまりイマジネーションの所産は、調和性と新奇性という二つの観点から評価されるわけである。文学的制作に関するこの主張は、イマジネーションに基づく推論にも適用されよう。すなわち推論の妥当性は、枚举されうるかぎりの思考の素材の中にその帰結を否定するような積極的な根拠が見当たらず、それらの思考の素材が調和的に整合していることに求められねばならない。そしてその推論が従来の固定観念を覆す新奇性をもつとき、「なぜこうした結合が今まで想像されなかったのだろう」と問わずにおれないよ

うな優れた仮説となるだろう。いわばイマジネーションに基づく推論は、調和性と新奇性という美的性格でもって評価されるべきものである。その意味で、イマジネーションの所産たる詩と推論的仮説とは同等のものだといえよう⁽¹⁹⁾。

しかし真実性ではなく美的性格でもって評価されるべき推論など、信頼するに足るものなのだろうか。この問いに対しては、次のような答えが用意されるはずである。すなわち、人間の知識が常に確実なものとはなりえないという可謬主義に基づくかぎり、推論の帰結が絶対的に真実となることは期待できない。仮に人間が構想した仮説が実在に対して真に合致していたとしても、人間にはそのことを論理によって確認するすべはない。したがって推論は実在との関係によって真実性を問われるのではなく、ただ推論内部の整合的な関係性によってのみ評価されねばならないのである。逆にいえば、理論というものの蓋然的性格を認めずに実在に関して真実性を標榜する理論こそ、信頼するに値しないのだといえよう⁽²⁰⁾。

ポーの提唱するイマジネーションに基づく推論は、演繹や帰納のように論理的に定式化できないため、推論形式としての明確さに欠けることは否定できない。それゆえその実践に際しても、ただ通念にとらわれぬよう心がけ、広い視野をもち、思考の素材となる諸々の情報の内に隠れたアナロジーを見出そうとするということ以外に、頼るべき指針はない。こうしたとらえどころのなさゆえに、その推論方法の意義は、その方法に準拠した推論の成果によってしか示しえないのかもしれない。だがポー自身が認めているように⁽²¹⁾、『モルグ街の殺人』は作者（ポー）が設定した謎を登場人物が解明するのだから、イマジネーションに基づく推論の実際の成功例とはいえない。そして『ユリイカ』もまた、ポー自身の知識不足ゆえに、現代科学の観点から高く評価できるような成果には至っていない。したがってその推論の方法の意義は、現段階では未決のままともいえよう。しかしポーの仮説形成的なイマジネーション論は、ともすれば明確な前提と

いう固定観念にとらわれ、飛躍的、発見的な推論の可能性を自ら排除してしまいがちな我々にとって、方法論的な反省を促す契機となるのではないだろうか。

注

- (1) ポー自身は、1846年8月9日のフィリップ・P・クック宛の書簡において、「推理の短編小説 (tales of ratiocination)」の一つとして「モルグ街の殺人」を挙げている (*The Letters of Edgar Allan Poe*, ed., John Ward Ostrom, Gordian Press, 1966 [以下 *Letters* と略称] vol. 2, p. 328.)。この時点でポーは、主人公デュパンが事件の謎を解くという形式の短編小説を、「モルグ街の殺人」に続いて二本（「マリー・ロジェの謎」[“The Mystery of Marie Rogêt”, 1842]と「盗まれた手紙」[“The Purloined Letter”, 1845]）を発表し終えている。それゆえこの書簡において「推理の短編小説」と呼ばれている作品は、これら一連のデュパンもののことだと考えることができるだろう（1844年7月2日のジェイムズ・R・ローウェル宛の書簡では、執筆したばかりの「盗まれた手紙」が「自分の推理の短編小説のうちで最高のもの」だとも述べられている [*Letters*, vol. 1, p. 258]）。だが「モルグ街の殺人」を執筆した当初からポーがこのようなシリーズ化を意図していたとは考え難い。「マリー・ロジェの謎」の冒頭部では、前作「モルグ街の殺人」が主人公デュパンの特異な心的性格の描写を意図して執筆されたことに言及し、「その主題を再び取り上げようとは思ひもしなかった」と述べている (*The Complete Works of Edgar Allan Poe*, ed., J. A. Harrison, 17 vols., New York, AMS Press, 1965, V, 3. 以下、書簡以外のポーの典拠はこの全集に拠り、[] 内に巻数とページ数を示す)。したがって「探偵小説」いうジャンルがこの一連の「推理の短編小説」を基盤として成立したとしても、当初からポーがそうしたジャンルの作品として「モルグ街の殺人」を執筆したとはいえないだろう。
- (2) このポーの指摘は、コウルリッジの『文学評伝』13章末尾に基づいているが、

その読解は正確ではない。Samuel Taylor Coleridge, *Biographia Literaria*, ed., J. Shawcross, Oxford UP, 1958, vol. 1, p. 202.

- (3) 骨相学 (phrenology) は、19 世紀に西洋諸国で流行した (疑似) 科学の一つである。この骨相学では、大脳皮質が 35 箇所の部分に分類され、各部分の機能に応じて人間の心的特性も 35 種類に分類されている。そして大脳皮質のどの部分がより発達しているかによって個人の能力や気質が特徴づけられ、その特徴は大脳皮質と相関的に発達した頭蓋骨の形状から判定できるという。この骨相学において構成力と結合力とが区別されていると、ポーは述べているわけである。しかし実際の骨相学では、構成力 (constructiveness) は 35 種類の心的特性の一つとして挙げられているものの結合力については何も論じられていない ("Outlines of Phrenology" J. G. Spurzheim, M. D., Boston, 1832, in *Significant Contributions to the History of Psychology 1750-1920*, ed., D. N. Robinson, Series E, Physiological Psychology, vol. II, Washington, D. C.: University Publications of America, 1978 を参照した)。またポー自身は 1836 年 3 月に、「サザン・リテラリー・メッセンジャー」誌に骨相学に関する記事を書き、35 種類の心的特性のすべてを列挙しているが、そのなかにも結合力に相当する能力は見当たらない [VIII, 252-255]。この点については、次のように考えることができるだろう。ポーは 1836 年 4 月に発表した論文「ドレイクとハレック」において、骨相学のいう「コーザリティの能力」とコウルリッジのいう創造的な「イマジネーション」とを同定し、他方で骨相学のいう「コンパリソンの能力」とコウルリッジのいう結合的な「ファンシー」とを同定していた [VIII, 275-318]。しかし 1840 年の論文「アルシフロン論」においてポーはこの見解を翻し、創造性と結合性とは区分されるものではないと考えるようになる [X, 60-71]。その際に、おそらくポーは (骨相学において「構成力」が独自の項目としてあることを忘れて) 創造的な構成作用をもたらす「コーザリティの能力」と結合作用をもたらす「コンパリソンの能力」とが骨相学において区別されていると考え、これを誤りだと判断したのであろう。拙稿「ポーにおける詩的イマジネーション論の変

遷」、『文芸学研究』第1号、文芸学研究会、1998年、pp. 72-95を参照のこと。
なお「モルグ街の殺人」の4年後、ポーは短編小説「天邪鬼」(“The Imp of the Perverse”, 1845)において、骨相学および一切の形而上学が先験的にでっちあげられたものだとして批判するようになる [VI, 145]。

- (4) ただしポー自身は、イマジネーションに基づく推論と帰納との相違を、この段階でまだ意識していない。「モルグ街の殺人」の続編ともいえるべき短編小説「マリー・ロジェの謎」では、デュパンがモルグ街の事件において立てた推論が帰納に基づくとされている [V, 3]。
- (5) 短編小説「マリー・ロジェの謎」でも同様に、「直接的なことの調査に限定し、付帯的ないし付随的な出来事をすっかり無視する」ような捜査方法をデュパンが批判している [V, 38-39]。そして広く視野をとる思考方法は、単に犯罪事件の捜査にのみ有効なものではなく、「現代科学」においても同様に有効であるという [39]。デュパンは、今までにも「無数の最も価値のある発見が、付帯的、偶発的、偶然的な出来事に負っている」と指摘し [39]、「偶然的に、そして普通の予想範囲を越えて生ずる発想のために、単に大きいだけではなく最大の余地を設ける必要がある」と述べる [39]。つまり明確な前提から必然的な結論へと帰結するような着実な論理的思考に依存するのではなく、「見かけ上は無関係」な [39] 領域をも視野に入れたうえで、偶然的な発見が得られる可能性に備えるべきだというのである。もちろんこのように語るデュパンは、この推論形式が確実な根拠に根ざしたものではないことを忘れたわけではない。それどころか、「いかにありうるかというヴィジョン」を構想するその方法は「もはや哲学的ではない」とまで言いきっている [39]。哲学的に認められた当時の論理的思考方法とは相容れない、しかしより生産的な思考方法をポーが提唱しようとしていることは、十分理解できよう。
- (6) この一連の論述は、短編小説「メッロンタ・タウタ」(“Mellonta Tauta”, 1849)の一部分 ([VI, 201-206])を下敷きにしている。
- (7) 本稿の第1節でふれたように、ポーは人間に想像しうるものはすべて感覚的経

験を経て獲得された観念に基づくと考えていた。この点に関して、ポーは基本的に経験論的だといえよう。しかしポーは、五官に基づかず具体的な観念像をもたらすこともない特異な感覚（直観的ファンシー）の存在を認めることによって、従来の経験論の枠を大きく逸脱し、このような身体論を構想するようになるのである。この点に関しては、本稿注20、および拙稿「ポーとボードレールにおけるイマジネーション概念」、『美学』第48巻3号、(191号)1997年12月、pp.13-24を参照のこと。

- (8) 随筆集『マージナリア』(*Marginalia*)のうち1845年に発表された一篇において、ポーはスウェデンボルグ主義者がこの「メスメリズムの啓示」を「絶対的に真である」と評価したことを揶揄し、「この話は初めから終わりまで純然たるフィクションである」と述べている[XVI, 71]。しかしこの小説に示された思想がポー自身の真摯な思考に基づいていることは、1844年7月2日のジェームズ・R・ローウェル宛の書簡(*Letters*, vol. 1, pp. 256-258)や1844年7月10日のトーマス・H・チヴァース宛の書簡(*Letters*, vol. 1, pp. 259-260)からも明らかである。また1845年1月4日のジョージ・ブッシュ宛の書簡では、この作品が純粋にフィクションではあるものの、そこに自分の独創による思想を盛り込んだと述べている(*Letters*, vol. 1, p. 273)。ポーがビールフェルト男爵なる人物の「フィクションによって思想を表現する技芸(*L'art d'exprimer les pensées par la fiction*)」に多大な関心を示しており(「ロングフェローのバラッド」[XI, 74]、『マージナリア』[1846年3月分][XVI, 91])、文芸作品を思想表現の媒体として利用することに積極的だったことも指摘しておこう。
- (9) 厳密に言えば、この方法は「モルグ街の殺人」における推論方法とは異なり、統計的に蓋然性の高い仮定を用いて推論する確率論的な仮説演繹法的一种だと考えられよう。その方法が方法論として認められるようになるのは、W・S・ジェヴォンズの『科学の諸原理』(*The Principles of Science*, 1874)以降のことだという。自明の前提に基づかない蓋然的仮説は、19世紀後半に至るまで科学的なものとは認められなかったのである。内井惣七「19世紀イギリスの科

学方法論」(1)、(2)『人文研究』(大阪市立大学文学部紀要・哲学)31号(1979) pp. 5-23、32号(1980) pp. 36-47 参照。ポー自身は、暗号解読も「分析的能力(analytic ability)」に基づくものと考えていた。「暗号文に関する覚書」[XIV, 116] 参照。

- (10) この主張は、「注目すべき書簡」の末尾に引用された「私は自らの神聖な熱狂に耽溺することにしよう」などといった一連のケプラーの発言[198]を根拠にしているようである。それらの引用はケプラーの『世界の調和』(*Harmonice mundi*, 1619) 5巻の序文からの翻案ともいべきものであるが、その文脈においてケプラーを熱狂させている天啓の内容は、プトレマイオスの説に通底する調和宇宙論に関するものである。いわゆるケプラーの三法則がイマジネーションによって構想されたというポーの指摘は、少なくともこの序文からは読み取ることができない。*Johannes Keplers kosmische Harmonie*, hrsg. und übertragen von W. Harburger, Frankfurt am Main, Insel, 1980 (Der Dom: Bücher deutscher Mystik) pp. 222-224. なおケプラーがイマジネーションに基づいて推測したということについては、ポーの随筆集『示唆の章』(*A Chapter of Suggestions*, 1845) にも指摘がある [XIV, 187]。

- (11) ここまで見てきたように、ポーは「注目すべき書簡」の中で、イマジネーションに基づく推論を演繹や帰納と対比的にとらえていた。しかしそれにもかかわらず、その論の末尾部分では、よく吟味すればイマジネーションに基づく推論も結局のところ演繹か帰納のいずれかに属するだろうと曖昧な指摘がなされている [XVI, 197]。これは、情報の連鎖を発見するファンシー的な過程と、その発見を整合的に理論化する過程とを、ポー自身が明確に区別できていなかったことによると考えられる。すなわち後者の過程には、蓋然的に構想された見解を演繹的に明確化する段階と、その理論と経験的対象との一致を帰納的に検証する段階とが含まれており、その二つの段階を経ることによってはじめてファンシーがイマジネーションにまで高められると考えられるのだが、ポーはこうした推論の過程を明確に自覚できなかったのである。この点における思考

の不徹底さは、ポーにおける限界だといえよう。

- (12) こうしたポーのイマジネーション論は、フランスのボードレールに継承されている。「モルグ街の殺人」を「モルグ街の二重の殺人——オーギュスト・デュパンの予見的諸能力」(《Double assassinat dans la Rue Morgue —— Facultés divinatoires d'Auguste Dupin》) という題で 1855 年に仏訳したボードレールは、評論「エドガー・ポーに関する新たな覚書」(《Notes nouvelles sur Edgar Poe》, 1857) において、ポーのイマジネーション論について次のように述べている。「彼にとって、イマジネーションは諸能力の女王である。(中略) イマジネーションは、まず哲学的方法の外にあって、諸事物の内面的で密やかな関係を、照応 (correspondances) とアナロジーとを感知する、ほとんど神的な能力なのである。彼がこの能力に授けた名誉と職務は、(少なくともこの著者の考えをよく理解するなら) イマジネーションのない学者が偽の学者か、あるいはせいぜい不完全な学者にすぎないと思われるほどの価値を、この能力に与えるのである。」Charles Baudelaire, *Œuvres complètes*, présenté et annoté par C. Pichois, Gallimard, Paris (Bibliothèque de la Pléiade), 1975, vol. 2, pp. 328-329. そしてこのイマジネーション論は、絵画論へと適用されることになる。ボードレールはサロン評「1859年のサロン」(《Salon de 1859》) において、自然模倣を志す画家に対して「外的自然の存在は確かなことなのか」、「自然のすべてを、自然の内に含まれるすべてを知っていると確信しているのか」と問い、その写実主義的傾向を可謬主義的見地から批判する (p. 620)。そしてイマジネーションに基づいて諸事物を結合し、新奇な世界を描写すべきだと論を展開していくのである (p. 620ff.)。ポーのボードレールへの思想的影響に関しては、前掲の拙稿「ポーとボードレールにおけるイマジネーション概念」、および「ボードレールにおける詩画比較論——ポーからの思想的影響を中心に」、『文芸学研究』第2号、文芸学研究会、1999年、pp. 74-102を参照されたい。後者の論文では、細部に拘泥せず遠くから見ることの意義をボードレールが絵画の鑑賞のレベルで重視していたことについても指摘されている。

- (13) ベーコンの帰納法は、ポーが批判しているような単純枚挙による帰納法と考えられることが多かったが、現在では、ベーコン自身の提唱した帰納法がむしろ仮説演繹法に近い推論方法だったと考えられている。後代の経験論者たちが、仮説を用いて論を展開する「デカルト主義」を予断に基づく推測として批判し、仮説を利用するベーコン自身の方法論をも歪曲したのである。この点についてはたとえば、市井三郎「帰納法と弁証法」（雑誌『思想』、岩波書店、1957年7月、pp. 60-74所収）などを参照されたい。
- (14) デカルト主義とベーコン主義との相違は、真実性の根拠を先験的な観念に置くか経験的感覚に置くかという相違に由来するわけだが、こうした対立は、真実らしさの描写が求められた近代芸術の分野にも反映されていると考えることができよう。すなわち先験的直観に基づいて観念的世界を明らかに示そうとする立場は、観念的な理想美の模倣を目指す古典主義的傾向に、そしてありのままの自然の解明を目指す経験論的立場は、感覚的経験世界を描写しようとする自然模倣的、写実主義的傾向に、それぞれ影響を及ぼしていると考えられよう。少なくとも、フランスの人工式庭園に対してイギリス人が自然式庭園を造園しようとしたことや、イギリス経験論の影響を強く受けた18世紀中葉以降のフランスにおいて写実主義的な芸術思潮が強まっていったことなどは、このような観点から理解することができるのではないだろうか。ポーが目指した方向は、この二つの立場のいずれにも依拠せず、蓋然的にしか知られえぬ世界をイマジネーションによって示そうとすることだったのである。ポーの思想的影響を受けたボードレールが古典主義や写実主義とは異なる芸術観を開いたことについては、前掲の拙稿「ボードレールにおける詩画比較論」を参照されたい。
- (15) パースの典拠は以下の全集により、慣例に従って巻数と項番号を（ ）内に示す。*Collected Papers of Charles Sanders Peirce*, Thoemmes Press, 1998. 本文中の言及箇所は、「プラグマティズムとプラグマティシズム」（“Pragmatism and Pragmaticism”）と題される1903年の連続講義に含まれている。なお後にふれる「神の實在についての疎かにされてきた論証」については、邦訳として、パー

ス著作集3『形而上学』、遠藤弘訳、勁草書房、1986年、pp. 145-180所収のものを参照できるが、おもに「瞑想」について論じられている箇所(6, 459-464)は訳出されていない。

- (16) パースもまた可謬主義を思想の基盤としている。いかなる認識も実在そのものに即したものととはならないという可謬主義は、ボードレールの場合は写実主義に対する批判、さらには象徴主義的見解へと展開するのであるが、パースの場合はプラグマティズムや記号論へと展開するのである。パースの思想の全体像について考察するにあたり、特に、伊藤邦武『パースのプラグマティズム—可謬主義的知識論の展開』、勁草書房、1985年を参照した。
- (17) パースは1868年の論文「人間に備わっているはずだと考えられてきた若干の能力に関する問い」(“Questions Concerning Certain Faculties Claimed for Man”, 5, 213-263)において、既にデカルト的直観論を批判している。
- (18) 「モルグ街の殺人」における推理の方法とパースのアブダクションとの類似に関して、既に指摘がある。ナンシー・ハロウィッツ「推理とは何か? ——チャールズ・S・パースとエドガー・アラン・ポー」(ウンベルト・エーコ、トマス・A・シービオク編、小池滋監訳『三人の記号——デュパン、ホームズ、パース』、東京図書、1990年、pp. 257-287所収)参照。この論文ではポーのイメージネーション論についてはまったく言及されておらず、ポーとパースとの比較が表面的であるといわざるをえないが、本稿はこの論文から多大な示唆を得ている。なおパースは少年時代にポーの詩「大鴉」(“The Raven”, 1845)を好んで朗唱していたとも伝えられ(同書に掲載された論文、トマス・A・シービオク、ジーン・ユミカ=シービオク共著「僕の方法は知っての通り——パース対ホームズ」、p. 70)、パースが早くからポーの作品に親しんでいたことは明らかである。しかしハロウィッツも指摘しているように、思想的影響がどの程度だったのかについて実証的に論ずるのは困難であろう。現段階では、演繹と帰納との二分法に対するパースの反論が、ポーと地理的、時代的に近いところで生じたことを指摘することしかできない。パース自身の思想内容を含め、さらなる検

討が必要だろう。

- (19) 本稿第3節で扱った「注目すべき書簡」を内を含む宇宙論『ユリイカ』では、その序文で、その作品が美的なものであり、詩として読まれるべきものだと思われている [XVI, 183]。たしかにここでは『ユリイカ』が「真実の書 (Book of Truths)」であるとも述べられているが [183]、ここでいう「真実」とは実在と推論との関係に関するものではなく、「完全な首尾一貫性こそ絶対的な真実にほかならない」[196] という意味での、論の整合性を意味するものだと考えられる。「いかなる真実も自明のものではない」[188] といったときの概念規定とは異なることに注意したい。なおボードレールは評論『我が同時代人の数人についての省察』(*Réflexions sur quelques-uns de mes contemporains*) の中の「ヴィクトル・ユゴー」(*Victor Hugo*, 1861) 第4節において、明らかにポーの『ユリイカ』をふまえた宇宙論について言及した後、詩の「超科学的性格」を示す「詩的推測 (la conjecture poétique)」の重要性を強調している (Baudelaire, *op. cit.*, pp. 137-139)。

- (20) ポーは短編小説「モノスとウナとの対話」("The Colloquy of Monos and Una" 1841) において、パスカルの「我々のすべての推論は直感 (sentiment) に譲ることに帰着する」という言葉 (『パンセ』*Pensées*, ブランシュヴィック版、274) を引用し、不毛な知識体系に陥りがちな「純粹知性」にではなく、むしろ美をとらえる「趣味」を重視すべきだと主張している [IV, 201-205]。この作品ではその「趣味」が直観 (intuition) とも同一視されているが [204]、ポーにとって「直観」とは、五感とは異なる感覚である。すなわち五感に妨げられない状態 (気絶、睡眠など) において「天使的」身体を通じて世界をとらえる感覚が直観であり、その直観の享受した世界は覚醒状態の人間には明晰には認識されないものである。デカルト的な直観とは異なることを確認しておきたい。この点に関しては、前掲の拙稿「ポーにおける詩的イマジネーション論の変遷」と「ポーとボードレールにおけるイマジネーション概念」を参照されたい。

- (21) 1846年8月9日、フィリップ・P・クック宛書簡 (*Letters*, vol. 2, p. 328) 参照。